第 18 回須坂新校再編実施計画懇話会

日時：令和７年１月 28 日（火）
午後５時 30 分～午後７時
会場：須坂市生涯学習センター　ホール

＜次 第＞

１ 開会

２ 挨拶

３ 構成員の交代等について（報告）

４ 会議事項

（１）「第 17 回須坂新校再編実施計画懇話会」のまとめ

（２）須坂新校施設整備の状況について（報告）

（３）校名選考の観点と選考方法について

５ その他

＜次回の予定＞

第 19 回須坂新校再編実施計画懇話会

（日時）調整中

（会場）調整中

６ 閉会

新校再編実施計画懇話会開催要綱

（目的）

第１　県教育委員会が、統合新校ごとの再編実施計画を策定するにあたり、再編対象校に加えて、対象校が所在する地域の意見を聴くため、「新校再編実施計画懇話会」（以下、「懇話会」という。）を開催する。

なお、懇話会は、地方自治法第 138 条の４第３項の規定に基づき、法律又は条例により設置された附属機関ではないものとする。

（会議事項）

第２　懇話会は、次の事項について意見交換を行う。

（１）学校像、教育方針等に関すること

（２）校地・施設・設備等に関すること

（３）管理運営等に関すること

（４）教育内容等に関すること

（５）その他、県教育委員会が必要と認める事項に関すること

（構成員）

第３　懇話会の構成員は、統合対象校の学校関係者（校長、教職員等）、地域の代表（自治体関係者、産業界の代表等）、同窓会、ＰＴＡ、生徒の代表等とし、必要に応じ、県教育委員会が依頼する。

２　会議に座長を置く。

（開催期間）

第４　会議は統合新校が開校するまでの間、開催するものとする。

附 則

この要綱は、令和２年 10 月 26 日から施行する。

須坂新校再編実施計画懇話会　構成員名簿

○印 新規構成員

	区分	氏名	所属等
1	自治体	三木　正夫	須坂市　市長
2		田中　洋友	小布施町　副町長
3		○ 澁谷　茂夫	高山村教育委員会　教育長
4		勝山　幸則	須坂市教育委員会　教育長
5	産業界	春原　博	須坂商工会議所　専務理事
6		神戸　佳代	小布施町商工会　女性部長
7		西原　弘樹	株式会社サンジュニア　代表取締役社長
8	同窓会	浅井　洋子	須坂東高等学校同窓会　会長
9		霜田　剛	須坂創成高等学校同窓会　副会長
10	学識経験者	半田　志郎	国立大学法人信州大学　特任教授
11	PTA	大山　由香里	須坂東高等学校ＰＴＡ　会長
12		長岡　孝典	須坂創成高等学校ＰＴＡ　会長
13		髙山　美穂	上高井郡市ＰＴＡ連合会　副会長
14	小中学校関係者	坪井　扶司夫	上高井校長会　代表　（墨坂中）
15		上野　恵佐夫	上高井校長会　代表　（豊洲小）
16	地域	坪井　俊文	長野地域振興局　局長
17		二ノ宮　邦彦	元 県立高等学校長
18		小林　雅彦	須坂市教育委員会　前教育長　（座長）
19	再編対象校	安藤　駿	須坂東高等学校生徒会　会長
20		阿部　大輔	須坂東高等学校生徒会　副会長
21		河田　晴森	須坂創成高等学校生徒会　会長
22		石井　ひなの	須坂創成高等学校生徒会　副会長
23		山田　純子	須坂東高等学校長
24		山岸　暢	須坂東高等学校　教諭
25		羽山　功	須坂創成高等学校長
26		市村　宣幸	須坂創成高等学校　教諭

事務局

須坂東高等学校	
中村 勝博	教頭・副事務局長
嶋田 順一	
酒井 健次	
山岸 暢	
酒井 知之	

須坂創成高等学校	
宮川 敏晃	教頭・事務局長
市村 宣幸	
柳澤　亘	
春原　真	
塚田 和弘	

高校再編推進室	
井出　敦	主幹指導主事
有坂 清明	主任指導主事（須坂新校担当）
土橋 邦彦	主任指導主事（須坂新校副担当）

学びのイメージ

実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校

育てたい生徒像

- ○ 探究的な学びにより身に付けた力で自分の未来を積極的にデザインできる生徒
- ○ 他者や社会と主体的に協働できる、コミュニケーション力を持った生徒
- ○ 多様な他者とつながり、新しい価値を生み出し、よりよい社会実現のために学び続ける生徒

目指す学校像

- ○ 地域をフィールドとした探究的な学びをとおして、課題発見解決能力を育む
- ○ 学科や学年を超えた協働的な学びをとおして、キャリアデザイン力を育む
- ○ 地域とともに学び、主体的に地域の未来を創造する力を育む

地域の未来を、地域の方々と共に創る

コミュニティデザインハイスクール

農業科 ― 工業科 ― 商業科 ― みらいデザイン科（仮称）
※新たな普通科

４学科の連携で地域の未来づくりに参画

専門科の学びで得た農業・工業・商業・デジタルなどの視点

みらいデザイン科の探究活動で得た芸術・歴史・福祉・国際などの視点

学びの柱

- ◆ 実体験をとおして、自分と地域の未来を創造する学びを展開
- ◆ 各科の学びの成果をもとに協働的な探究を実施
- ◆ 情報リテラシーを徹底して学習し、いつでも、どこでも、ICT を積極的に利活用

具体的な取組

- ○ 校外学習、校外活動の単位認定（ボランティア、大学の講義、海外留学など）
- ○ 全学科でのデュアルシステム（校外での実践的な学び）
- ○ 世代を超えた交流学習（中学校との合同探究発表会、地域への公開講座など）
- ○ 生徒自らが学校を創造していく自主的活動（生徒会活動と部活動）
- ○ 探究の学びを深化させる「地域連携コーディネーター」が校内に常駐
- ○ 地域との協働による生涯学習の拠点づくり

単位制
学科の枠を超え、他科の専門科目も履修して自身の学びを深化
学校を飛び出してのアクティブな探究活動を学びの中心に

連携
コミュニティデザインを研究する国内外の大学との連携
地域を学ぶ国内外の高校生と交流

地域の方々との共同研究

新校が生涯学習の拠点

須高地域共学共創コンソーシアム

大学・専門学校

医療・福祉機関

地元企業・商工会

自治体

研究機関

第 17 回　須坂新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日　時	令和６年９月９日（月）　午後６時から午後７時 15 分		
場　所	須坂市生涯学習センター　３階 ホール		
出　席 **（敬称略）**	三木 正夫，藤沢 敏和，勝山 幸則，春原 博，神戸 佳代，西原 弘樹，浅井 洋子，霜田 剛，半田 志郎，大山 由香里，長岡 孝典，髙山 美穂，坪井 扶司夫，上野 恵佐夫，坪井 俊文，二ノ宮 邦彦，小林 雅彦，安藤 駿，阿部 大輔，河田 晴森，石井 ひなの，山田 純子，山岸 暢，羽山 功，市村 宣幸（以上 25 名）		
欠　席 **（敬称略）**	田中 洋友，大宮 透（以上２名）	**傍聴者**	５名
事務局	須坂東高校	中村教頭（副事務局長），嶋田教諭，酒井(健)教諭，山岸教諭，酒井(知)教諭	
	須坂創成高校	宮川教頭（事務局長），市村教諭，柳澤教諭，春原教諭，塚田教諭	
	県教育委員会	井出主幹指導主事，土橋主任指導主事，有坂主任指導主事	
当日資料	次第，須坂新校学びのイメージ，第 16 回須坂新校再編実施計画懇話会まとめ（案），ワーキンググループの設置（報告）須坂新校施設整備基本計画（報告），校名選考の観点および選考方法（案）		

会議事項

(1)第 16 回須坂新校再編実施計画懇話会のまとめについて　(2)須坂新校ワーキンググループについて（報告）
(3)須坂新校施設整備基本計画について（報告）　(4)校名選考の観点と選考方法について（案）
(5)懇話会の開始時間について

構成員から出された主な意見（要旨）

会議冒頭

資料１ページの学びのイメージについて事務局（県教委）から改めて説明。

【意見・感想】

・地域として良い学校をつくるということを懇話会としても意識していく。構成員も学校と一緒にイメージを膨らませていくことが大切。

・統合までにどのようなことをしなければならないのか、自治体と学校側がそれぞれ具体的なイメージを持てる形にしたほうが良い。

会議事項

(1)第 16 回須坂新校再編実施計画懇話会のまとめについて

資料２～３ページについて事務局（県教委）から説明。質問、意見なし。

(2)須坂新校ワーキンググループについて

資料４ページについて事務局（学校）から報告。

【質疑】

・探究的な学びと地域連携については、自治体に相談してもらえれば協力できることがある。

→大変ありがたい。学校運営検討ワーキングをとおして相談させていただく。（学校事務局回答）

・検討途中でも自治体や教育委員会と相談できる体制が作れれば良い。

(3)須坂新校施設整備基本計画について

資料５ページについて事務局（県教委）から報告。質問、意見なし。

(4)校名選考について

資料６ページについて事務局（学校）から説明。

【質疑】

・懇話会では、農工商に新たな普通科が加わる全く新しい学校ということで話を進めてきた。その点から考えると、両校の名前を入れるとかどちらかの名前にするというのではなく、コミュニティデザインハイスクールという、新校の理念が表されている全く新しい校名を検討するのが良い。

・選考の観点に全く新しい形の学校ができるということがイメージできるような表現を書いておかないと、現在の高校の名称に引っ張られるということが起こるのではないか。懇話会で新校ということをキーワードにしているので、選考の観点においてその表現の仕方を検討してほしい。

・コミュニティデザインハイスクールという言葉に注釈をつけるなど、丁寧に表現したほうが新校についてイメージできるのではないか。

・新校には「須坂」という地名が入ったほうがわかりやすいのではないか。

・学びのイメージの中の「地域」というのはどういった単位を想定しているのか。

→学びのイメージをつくりあげていく過程においては、地元須坂市だけではなく須高地域全体ということであったと認識している。（県教委回答）

・新校の名称の中に地域を特定するものをつけてもらった方がイメージしやすいし、将来的にも大切なことだと思う。

・高校がどこにあるかというのは大事なことで、須坂や須高という地名が入るのは良いとは思う。しかし、それがなくてもその学校だということがわかるオリジナリティのある名前が良い。

・地域を課題にするとなった時に地域を限定すると、自分の通ってきている地域を題材にできない。学校の所在地と学びの地域については分けて考えた方が良い。

・ここまでで出た内容は、募集の観点に反映させることができるのか。

→ここでの意見交換を基に再検討し、募集要項案を作成する。（学校事務局回答）

・商標権等の調査を行うとあるが、これはどういうことか。

→校名を決定したところで、他の学校等からその名称は使えないという申し立てを受けた例がある。そのようなことを防ぐために専門家の見地を加えながら確認する。（学校事務局回答）

・公募する地域や対象者の年齢などの範囲はどうか。

→小諸新校の事例では募集要項を県教委のホームページに掲載した。したがって、広範囲からの公募となった。須坂新校もそれに倣うように考えている。（県教委回答）

・応募を待っているだけではなく、こちらからアプローチをすることがあってもよいのではないか。

・校名の公募について小中学生に分かりやすく伝えて意見を求めることは、大事な勉強になる。

・上記を実現するには統合の意義や新校の理念を小中学生向けに分かりやすく説明することが前提。

・新校の対象となる子どもたちに新校についてどのようにわかりやすく伝えるかというのが課題。また県教委や小中学校の先生とも一緒に考えていきたい。

・学校や教育委員会だけではなく市の広報なども利用して子どもたちにも参加しているという気持ちを持ってもらうことが大事。

(5)懇話会の開始時間について

懇話会の開始時間を 30 分早めて午後５時 30 分開始にすることを県教委より提案。反対意見なく了承。

その他

【次回】第 18 回懇話会

日程：調整中

須坂新校　校名選考の方法

＜前回案＞

選考方法	校名選考にあたっては選考の進め方や方法、公募結果、選考結果を懇話会にて報告し、意見交換を行った上で実施する。 〔一次選考〕 ・公募結果を参考に構成員による一次投票を行う。 ・公募及び一次投票の結果を参考に懇話会で校名案を３～５案程度にしぼる。 ・校名案の再検討を含め、構成員からの案を二次投票の対象に加え、対象を５～７案程度とする。 〔最終選考〕 ・二次投票の対象となった校名案候補に対し、商標権等の調査を行う。 ・商標権等の調査結果を踏まえ、構成員による二次投票を行う。 ・商標権等の調査及び二次投票の結果を参考に懇話会で校名案候補を選考する。
公募方法	①期間：令和　年　月　日　～　令和　年　月　日（1カ月間） ②内容：校名案と理由 ③方法：郵便、FAX、電子メール、両校事務室へ持参

↓

変更なし

須坂新校　校名選考の観点（前回との比較）

＜前回案＞

選考の観点	**① 校名は「長野県〇〇〇高等学校」とする。** **② 生徒が新校での学びに大きな希望を抱き、未来に向かって育っていくことができる学校像が表現されている。** **③ 設置される４学科の連携や「コミュニティデザインハイスクール」という新校の理念が表現されている。** **④ 地域とともにある高校として、地域の願いや期待が表現されている。**

＜修正案＞

選考の観点	**① 校名は「長野県〇〇〇高等学校」とする。** **② 統合により生まれる新しい学校において、生徒が未来に向かって成長していくことができるという学校像が表現されている。** **③ 設置される４学科の連携や、「地域の人々と共に学び、共に未来を創る」という新校の理念が表現されている。** **④ 「地域を学びの場に成長し続ける高校」としての姿が表現されている。**

＜主な変更点＞

②について　・「新校」を「統合により生まれる新しい学校」へ変更
　　・「育っていく」を「成長していく」へ変更

③について　・「人と人とがつながる」というコミュニティデザインの理念と新校の目指す姿を、「地域の人々と共に学び、共に未来を創る」として明記

④について　・須坂新校の目指す姿として学びのイメージに謳った、「地域を学びの場に成長し続ける高校」を明記

須坂新校の統合の方法

令和９年度

＜須坂創成高校校地＞		＜須坂東高校校地＞
須坂創成（令和７年度入学）	３年	須坂東（令和７年度入学）
須坂創成（令和８年度入学）	２年	須坂東（令和８年度入学）
須坂創成(令和9年度入学、現：中1)	１年	**須坂東(令和9年度入学、現：中1)**

令和10年度

＜須坂創成高校校地＞		＜須坂東高校校地＞
須坂創成（令和８年度入学）	３年	須坂東（令和８年度入学）
須坂創成(令和9年度入学、現：中1)	２年	**須坂東(令和9年度入学、現：中1)**
須坂創成(令和10年度入学、現：小6)	１年	**須坂東(令和10年度入学、現：小6)**

令和11年度

＜須坂新校校地＞		＜須坂東高校校地＞
須坂新校(令和9年度両校入学、現：中1)	３年	
須坂新校(令和10年度両校入学、現：小6)	２年	
須坂新校(令和11年度入学、現：小5)	１年	

- ○ 令和９年度に両校に入学する生徒（主に現在の中学１年生が該当）は３年生になる段階で須坂新校に転校する
- ○ 令和10年度に両校に入学する生徒（主に現在の小学６年生が該当）は２年生になる段階で須坂新校に転校する
- ○ 令和11年度入学生（主に現在の小学５年生が該当）からは須坂新校に入学する

須坂新校のイメージ

実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校

育てたい生徒像

- ○ 探究的な学びにより身に付けた力で自分の未来を積極的にデザインできる生徒
- ○ 他者や社会と主体的に協働できる、コミュニケーション力を持った生徒
- ○ 多様な他者とつながり、新しい価値を生み出し、よりよい社会実現のために学び続ける生徒

目指す学校像

- ○ 地域をフィールドとした探究的な学びをとおして、課題発見解決能力を育む
- ○ 学科や学年を超えた協働的な学びをとおして、キャリアデザイン[*1]力を育む
- ○ 地域とともに学び、主体的に地域の未来を創造する力を育む

地域の未来を、地域の方々と共に創る

コミュニティデザインハイスクール[*2]

農業科 ― 工業科 ― 商業科 ― みらいデザイン科（仮称）
※新たな普通科[*3]

４学科の連携で地域の未来づくりに参画

専門科の学びで得た農業・工業・商業・デジタルなどの視点

みらいデザイン科の探究活動で得た芸術・歴史・福祉・国際などの視点

学びの柱

- ◆ 実体験をとおして、自分と地域の未来を創造する学びを展開
- ◆ 各科の学びの成果をもとに協働的な探究を実施
- ◆ 情報リテラシー[*4]を徹底して学習し、いつでも、どこでも、ICT[*5]を積極的に利活用

具体的な取組

- ○ 校外学習、校外活動の単位認定（ボランティア、大学の講義、海外留学など）
- ○ 全学科でのデュアルシステム[*6]（校外での実践的な学び）
- ○ 世代を超えた交流学習（中学校との合同探究発表会、地域への公開講座など）
- ○ 生徒自らが学校を創造していく自主的活動（生徒会活動と部活動）
- ○ 探究の学びを深化させる「地域連携コーディネーター[*7]」が校内に常駐
- ○ 地域との協働による生涯学習の拠点づくり

単位制
学科の枠を超え、他科の専門科目も履修して自身の学びを深化
学校を飛び出してのアクティブな探究活動を学びの中心に

連携
コミュニティデザイン[*2]を研究する国内外の大学との連携
地域を学ぶ国内外の高校生と交流

地域の方々との共同研究

新校が生涯学習の拠点

須高地域共学共創コンソーシアム[*8]

大学・専門学校

医療・福祉機関

地元企業・商工会

自治体

研究機関

＜用語解説＞

＊1 キャリアデザイン

自分を分析して、自分の進むべき道（進路）を考え、自分のかけがえのない人生（＝キャリア）を主体的に考えていくこと。

＊2 コミュニティデザインハイスクール

「人と人がつながる」というコミュニティデザインの理念のもとで、設置する4学科が連携・融合し、研究の成果を地域の課題解決や未来づくりのために企業や自治体に提言することで、高校生が地域の未来づくりに主体的に参画していく、という新校の姿を表現した言葉。

＊3 新たな普通科

高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化（高等学校設置基準及び高等学校学習指導要領の一部改正）により、「学際領域に関する学科」、「地域社会に関する学科」、「その他特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科」といった特徴的な学びをする普通科が設置可能になった。須坂新校では「地域社会に関する学科」として「みらいデザイン科（仮称）」を設置し、高等学校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取組んでいく。

＊4 情報リテラシー

情報を適切に収集、評価、利用、発信する能力のこと。

＊5 ICT

情報通信技術。情報技術の「IT（Information Technology）」に通信の「C（Communications）」を組み合わせた用語。

＊6 デュアルシステム

産業現場での長期の就業体験を教育課程に位置付け、学校の授業と併用して学習する産業教育の仕組み。産業界と高校が連携をとりながら協働で人材を育成する教育システムを構築し、効果的に事業を推進するために、学校・地元自治体・産業関係団体による連携協議会の設置やコーディネーターを置くことが多い。

＊7 地域連携コーディネーター

新校が地域をフィールドとした学びを展開していくにあたり、学校と地域を結びつけるための窓口の役割を担う。生徒が地域に関することを相談したり、地域の方から学びへの協力の相談を受けるなど、教員とともに生徒の学びをサポートしていく。

＊8 共学共創コンソーシアム

高校生・行政機関・産業界・大学や専門学校・研究機関・地域住民らが協働する仲間、共同体のこと。参加者が当事者意識を持って参画し、対等な立場で共に学び合い、共に創り上げる協働活動を通じて、新校の学びをサポートしていく。このコンソーシアムが連携・協働する組織や環境が共学共創プラットフォームであり、地域社会全体の教育力の向上を目指す。